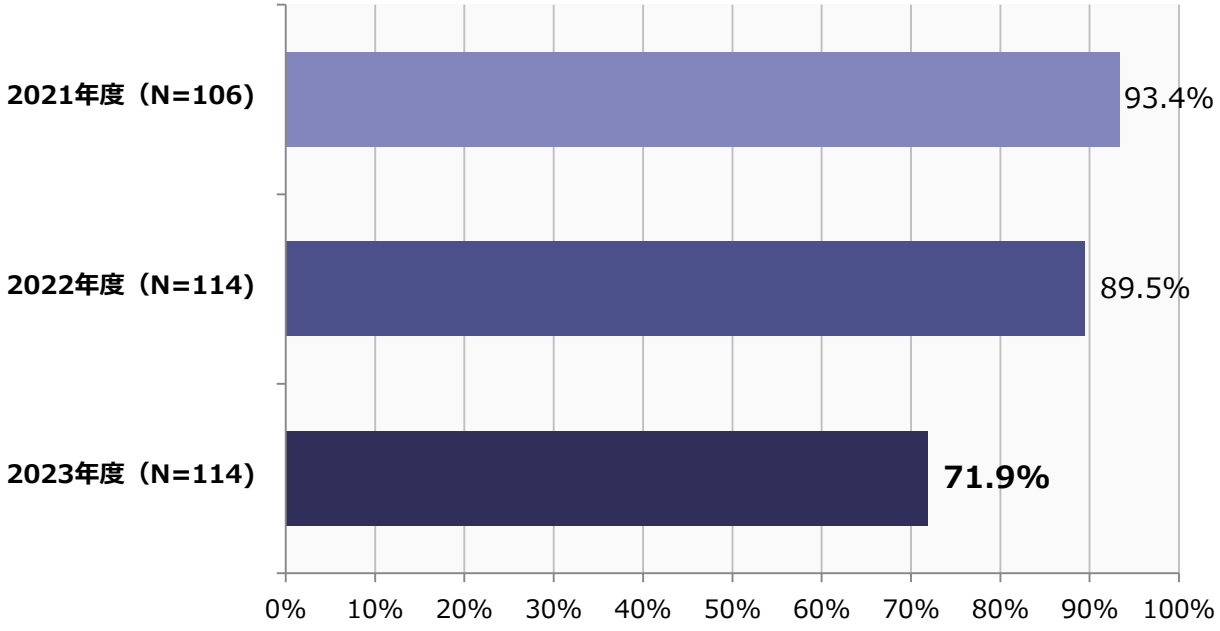
肺炎患者（入院）における尿中肺炎球菌抗原およびレジオネラ抗原検査率

感染症が疑われる患者において、各種培養検査を行うことは、抗生物質の決定や耐性菌出現リスクの低減に有用とされている。しかしながら、肺炎においては、必ずしも喀痰の採取が可能なわけでもなく、その陽性率も限られている。肺炎球菌とレジオネラ菌は重症肺炎を来す菌種として知られており、抗菌薬の選択や予後予測も含めて、その検査の重要性が示唆されているため、可能な限り全例で行うべき検査と考えられる。肺炎球菌抗原陽性例では、抗菌薬のde-escalationが容易になると考えられる。レジオネラ抗原陽性例では、適切な抗菌薬（セフェム系薬剤は効果無し）の選択が可能となる。また、レジオネラは保健所の届け出義務がある感染症であり、環境調査など公衆衛生の面においても重要である。



当院値の定義･算出方法

分子： 尿中肺炎球菌抗原およびレジオネラ抗原検査件数（人数）

分母： 肺炎入院患者数

×100 (%)

※グラフ中のN数は分母の値を示しています。

改善策について

検査漏れは主に時間外、当直帯での入院症例でした。呼吸器科担当医は引き継いだ際に、尿中抗原を提出することを徹底いたします。

文責：呼吸器内科主任部長
古山　和人